修士論文（要旨）
2020 年 1 月

# 接触場面における多言語話者間のやりとりに見られる会話の特徴
## ―多文化交流会の会話データの分析から―

指導　宮副　ウォン　裕子　教授

言語教育研究科
日本語教育専攻
218J3004
邱　捷珊

Master's Thesis(Abstract)
January 2020

# Features of Conversation of Multilingual Speakers: Base on the Data of Intercultural Party

Jieshan Qiu
218J3004
Master's Program in Japanese Language Education
Graduate School of Language Education
J. F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Yuko Miyazoe-Wong

目次

第１章　序論 ..... 1

1.1　研究背景 ..... 1
1.2　研究の目的と意義 ..... 3
1.3　本論文の構成 ..... 3

第２章　先行研究 ..... 4

2.1　成員カテゴリー化装置とやり取りの対称性 ..... 4
2.2　言語管理プロセスと参加調整 ..... 6
2.3　コミュニケーション・ストラテジー ..... 8
2.4　接触場面における仲介活動の先行研究 ..... 10
2.5　本稿の位置づけ ..... 10

第３章　調査概要 ..... 12

3.1　参加者 ..... 12
3.2　活動内容と手順 ..... 14
3.3　活動に対する働きかけ ..... 16
3.4　本稿における文字化の記号について ..... 17

第４章　調査結果及び分析 ..... 18

4.1　コミュニケーション・アコモデーション理論の試み ..... 18
4.2　カテゴリーごとに分析 ..... 19
4.3　リソースの活用 ..... 35
4.4　総合的考察 ..... 39

第５章　コミュニケーション・ストラテジーの使用実態 ..... 41

5.1　母語話者の CS ..... 41
5.2　非母語話者の CS ..... 44
5.3　バイリンガルの CS ..... 44

第６章　共通語としての日本語の意味づけ ..... 48

6.1　フォローアップ・インタビューからの考察 ..... 48
6.2　参加者としてのメリット ..... 49
6.3　日本語教育への示唆 ..... 50

第７章　まとめと今後の課題 ..... 52

参考文献
券末資料
謝辞

近年、グローバル化による人の移動に伴い、多文化間の交流が盛んになってきている。対面，非対面，ヴァーチャル空間を問わず、言語的・文化的背景の異なる人々が接触する場面が多様化している。たとえばインターネット上では、母語、第二言語、あるいは未習熟の言語などを使い、未知の人々同士が交信を行うことも珍しくない（宮副，2009：62）。

稿者が中国の大学で日本語を勉強していた時、職業として仲介役を担う翻訳や通訳に関する授業があったが、来日後、受けた日本語の授業では翻訳／通訳に関する授業はなかった。母国にいる時と比べ、来日後は接触場面でコミュニケーションをする時、母国についての話題が頻繁に現れ、仲介役を担う機会が増えたが、学校の学習ではこのような場面で仲介役としてどう対応するのかを誰も教えてくれなかったので、稿者のように苦労した留学生や外国人も多かっただろう。在日外国人の増加に伴い、学術の場面だけではなく、仕事や社交的な場面でも、多人数の接触場面で必要とされる「仲介活動」も増えているだろう。お互いの理解を進め、多文化共生社会を構築するためには、ますます仲介能力が求められるのではないだろうか。

そこで、本稿では多人数かつ多国籍の参加者を対象にし、実際の接触場面で起こりうる多文化交流会という形式を取り上げ、そのような接触場面でのコミュニケーションに見られる会話の特徴を明らかにした。また、実際のやり取りは、多くの場合、一回ではなく、数回あるのが普通だと考え、二回の多文化交流会を設け、その分析を通じて参加者が用いた仲介ストラテジーをより深く考察した。さらに、接触場面において共通語としての日本語を、参加者たちがどう意味づけているかについても考察を試みた。研究課題は 1）接触場面における多言語話者間のやりとりに見られる会話上の特徴は何か、2）多文化接触場面における仲介者たちはどのようなストラテジーを使うのか、3）日本語使用者は共通語としての日本語をどう意味づけているのか、の三点である。

上記の課題究明のために、＜成員カテゴリー化装置とやり取りの対称性＞＜言語管理プロセス＞＜コミュニケーション・ストラテジー（以下、CS）＞＜接触場面における仲介活動＞の 4 つの分析枠組みを利用し、考察を行った。研究課題 1 については多文化交流パーティーの活動内でのやりとりのデータを対象とし、成員カテゴリー化装置とコミュニケーション・アコモデーション理論の視点から、参加者を「話し手」、「聞き手」、「仲介者」という 3 つのカテゴリーに分類し、各カテゴリーに属する会話特徴について分析を行った。研究課題 2 については＜コミュニケーション・ストラテジー＞と＜接触場面における仲介活動＞の先行研究を踏まえ、仲介ストラテジーに着目し、「母語話者」、「非母語話者」、「バイリンガル」の 3 つのカテゴリーに分け、多文化接触場面における特徴的な例を取り上げ、分析を行った。研究課題 3 については、研究課題 1 と 2 の結果及び参加者のフォローアップ・インタビューのデータに焦点を当てて分析・考察を行った。

各研究課題については以下のことが明らかになった。

1）　多文化接触場面における多言語話者間のやりとりに見られる会話上の特徴を「役割の分担」と「リソースの活用」という 2 つにまとめた。参加者全員はずっと単一の役割カテゴリーに固定されるのではなく、多方向的に「話し手」、「聞き手」と「仲介者」を担当し、活動の遂行を促進した。また、参加者たちが、自分が興味を持つ small c(スモール c ：主観的な文化の意)の話題については自発的に意見や情報を述べ合うという双方向的な会話が頻繁に観察できた。

2）　母語話者の特徴的な仲介 CS としては＜仲間意識を示す＞と＜お互いの共通点を探すこと＞の 2 点が挙げられた。非母語話者の特徴的な仲介 CS には言語というリソースの活用を含め、実物やスマホのようなテクノロジーなどの活用が多く観察できた。そして、バイリンガルの仲介 CS としては、「背景知識を活用する」とまとめられた。自分の背景知識を活用しただけではなく、参加者の背景知識を引き出し、活かした姿が見られた。これにより、多文化接触場面では、言語能力の他に、背景知識の活用が活動の遂行や、参加者との距離を縮めることに効果が期待できることがわかった。

3）　参加者のアイデンティティにより、日本語への意味づけは異なるが、共通語としての日本語の可能性が示された。

今後の課題は、多文化接触場面において、仲介者の役割を活かすためはどのような活動をデザインしていく必要があるのか、また参加者に仲介 CS をどのように認識してもらうのかを解明することである。

参考文献

赤羽優子（2017）「第二言語としての日本語使用者同士のカテゴリー化実践 ： 第三者言語接触場面の対称的なやりとりに注目して」『国際日本研究』9, 83-105.

東照二（2009）『社会言語学入門（改訂版）』研究社.

奥村三菜子・櫻井直子・鈴木裕子（編）（2016）『日本語教師のための CEFR』くろしお出版.

岩田夏穂（2005）「日本語学習者と母語話者の会話参加における変化:非対称的参加から対称的参加へ」『世界の日本語教育』15, 135-151.

宇佐美まゆみ（2007）「改訂版：基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese:BTSJ)2007 年 3 月 31 日改訂版」『談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』

尾崎明人（1998）「異文化接触場面のコミュニケーション研究と日本語教育―コミュニケーション・ストラテジー研究の概観―」『日本語教育通信』32, 12-13.

岡田亜矢子（2008）「接触場面の『伝え合い』における参加者のカテゴリー―地域日本語教育実践から見えたこと―」『言語文化と日本語教育』35 号, 65-68.

栗林克匡（2011）「社会心理学におけるコミュニケーション・アコモデーション理論の応用『北星論集(社)』 47, 11-21.

杉原由美（2003）「地域の多文化間対話活動における参加者のカテゴリー化実践 ： エスノメソドロジーの視点から」『世界の日本語教育.日本語教育論集』13, 1-18.

高木智性・細田由利・森田笑（2016）『会話分析の基礎』ひつじ書房.

西坂仰（1997）『相互行為分析という視点』金子書房.

ネウストプニー、 J.V. （1995）「日本語教育と言語管理」『阪大日本語研究』7, 67-82.

畑佐一味（2012）「第 5 部　テクノロジーと習得　総論」『第二言語習得研究と言語教育』260-274.

ファン サウクエン（1998）「接触場面と言語管理」特別研究「日本語総合シラバスの構築と教材開発指針の作成」会議要録、国立国語研究所.

ファン・サウクエン（1999)「非母語話者同士の日本語会話における言語問題」『社会言語科学』第 2 巻第 1 号, 37-48.

ファン サウクエン（2011）「第三者言語接触場面と日本語教育の可能性」『日本語教育』150, 42-55.

春口淳一(2004)「言語ホストとしての上級学習者の自己参加調整ストラテジー 第三者言語接触場面における会話参加の一考察」『千葉大学日本文化論叢』5, 69-82.

方穎琳（2010）「接触場面における中国人日本語学習者のコミュニケーション・ストラテジーの使用―意味伝達問題を解決するための達成ストラテジーを中心に―」『言語文化と日本語教育』39, 122-131.

宮副ウォン裕子、吉村弓子(2009)「日本と香港をつなぐヴァーチャル教室の映画批評交換――異文化理解における映画の効果と外国人留学生の役割」『北海道言語文化研究』7, 29-40.

宮副ウォン裕子 (2014)「ヴァーチャル映画討論会における言語の社会化」『言語教育研究』

5,1-12.
宮崎里司（1990）「接触場面における仲介訂正ネットワーク」『日本語教育』71, 171–181.
村岡英裕(2002)「在日外国人の異文化インターアクションにおける調整行動とその規範に関する事例研究」『千葉大学大学院社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書』38, 115-126.
村岡英裕（2006）「接触場面における問題の類型」『千葉大学社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書』129, 103-116.
義永美央子（2009）「第二言語習得研究における社会的視点 一認知的視点との比較と今後の展望一」『社会言語科学』 第 12 巻第 1 号, 15−31.
山下隆史（2005）「学習を見直す」『文化と歴史の中の学習と学習者―日本語教育における社会文化的パースペクティブ』西口光一編著, 凡人社, 6-29.
山本志都（2005）「異文化コミュニケーションの日本語教育への活用」日本語教育研究協議会
https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/taikai/17_tokyo/bunkakai_3.html
（文化庁ウェブサイト　2019 年 12 月 28 日最終確認）

高等学校外语专业教学指导委员会（1998）「关于外语专业本科教育改革的若干意见」

Sacks, H. (1972a) On analyzability of stories by children. In J. J. Gamperz & D. Hymes (Eds.), Directions in sociolinguistics: The ethnograpy of communication: 325–345, New york: Holt, Rinehart and Winston.
――(1972b) An initial investigation of the usability of conversational data for doing sociology. In D. Sudnow (Ed.), Studies in Social Interraction: 31–74, The Free Press.
Beebe, L. M. & Giles, H. (1984) Speech-accommodation theories: a discussion in terms of second. language acquisition, International Journal of Social Language, Vol. 46: 5–32.
Fan, S. K. (1992) Language management in contact situations between Japanese and Chinese, Unpublished Ph.D. Dissertation, Department of Japanese Studies, Monash University, Australia.
Neustupny, R. (1996). Australians and Japanese at Morwell: Interaction in the work domain. *In Marriott, H. & Low, M. (eds), Language and Cultural ContacTFIth Japan. Melbourne: Monash Asia Institute, 156-171.*